

# ミニクセスター・セクター・スアリス

MOBILE SUIT GUNDAM IRON-BLOODED ORPHANS FANBOOK

早く大人になりたいくて



R18  
FOR ADULT

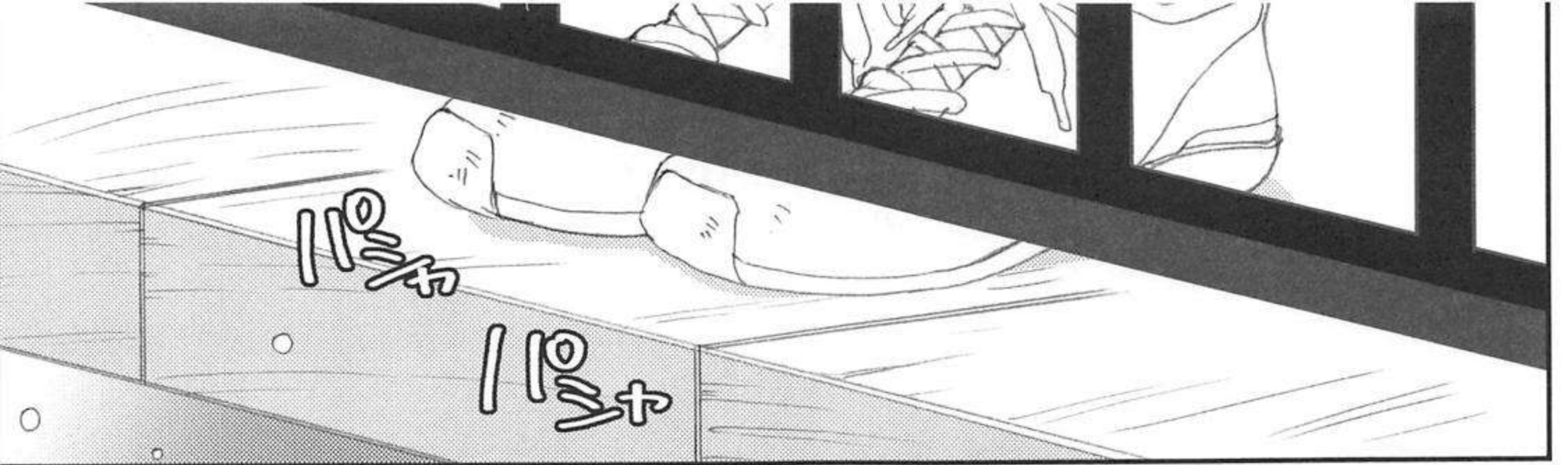


みくわた・せくありす





早く大人になりたくて









はじめて  
会ったときも

お弁当  
ガン見してて…



別に  
いーんじゃない

はあ…

遊び人…  
なのかな？

この人も  
サボってる  
よね



もしかして…  
お腹…  
空いてるなら  
食べます？

差し出したら  
あっさりと  
食べてくれた

うん

うんって  
…子供？

…今日も



これから  
えっちしませんか



この後  
ヒマですか？

ん？ふん



なんで？

えっ…や…  
学校サボっ  
ちゃったし

ヒマだし

ヒマつぶし？

あつ…いえっ  
そう…でもないって  
いうか…  
ええっと



お

オトナに…  
なりたいんです

……



いーよ









そんなんじや

俺：色んな所  
触るよ？

脚も思いつきり  
開くし



怖いなら  
やめる？

いーよ



女は初めてだと  
ちんこ突っ込んだら  
痛くて

血も出るん  
でしょ？

平気？

あ…れ？

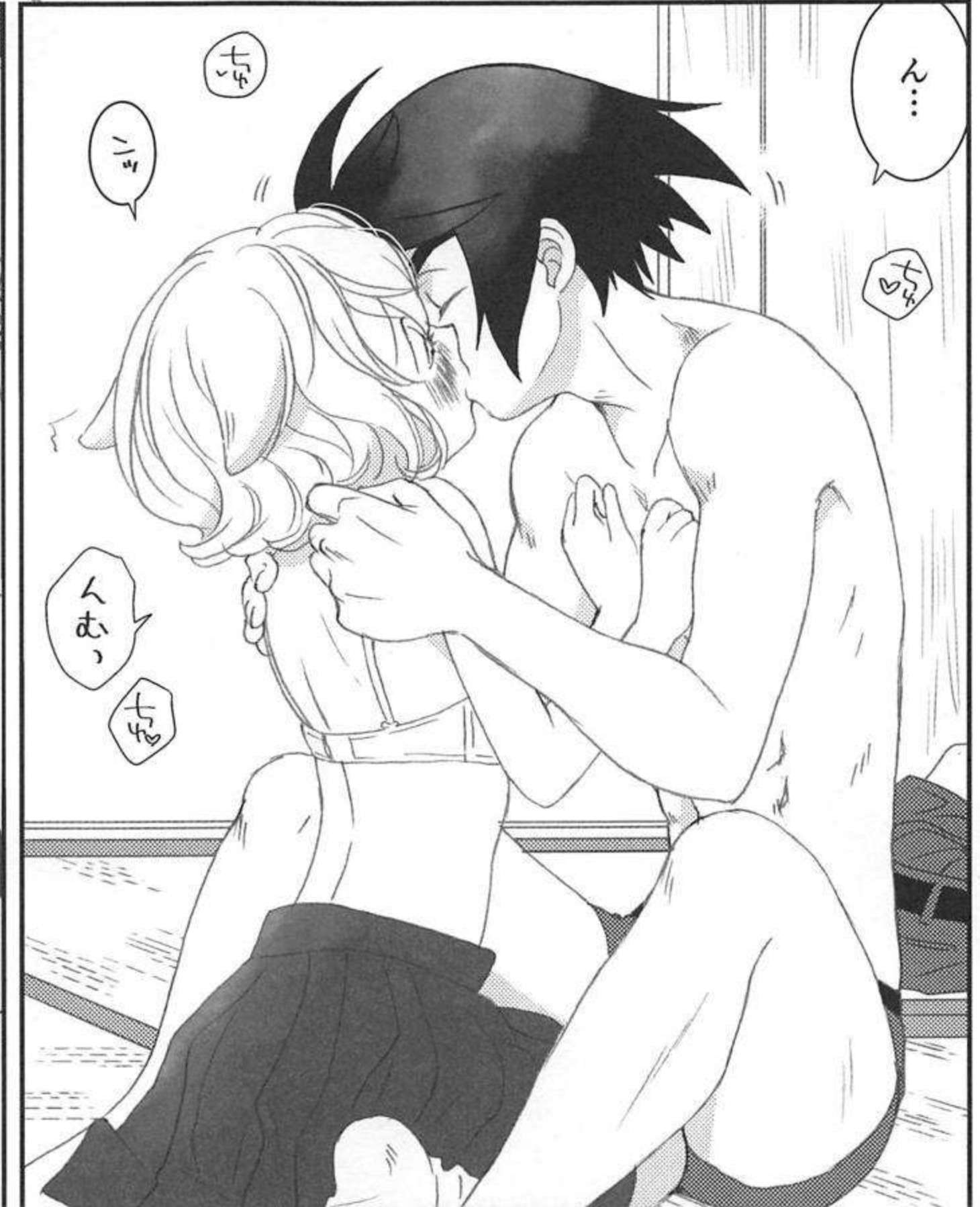


この人…

いい人だ……



あ…れ





ズンズン

あ ♡  
あ ♡  
あ ♡

あ ♡

お兄さんのくちびる...  
柔らかい♡

あ ♡  
舌?  
あ ♡  
あ ♡

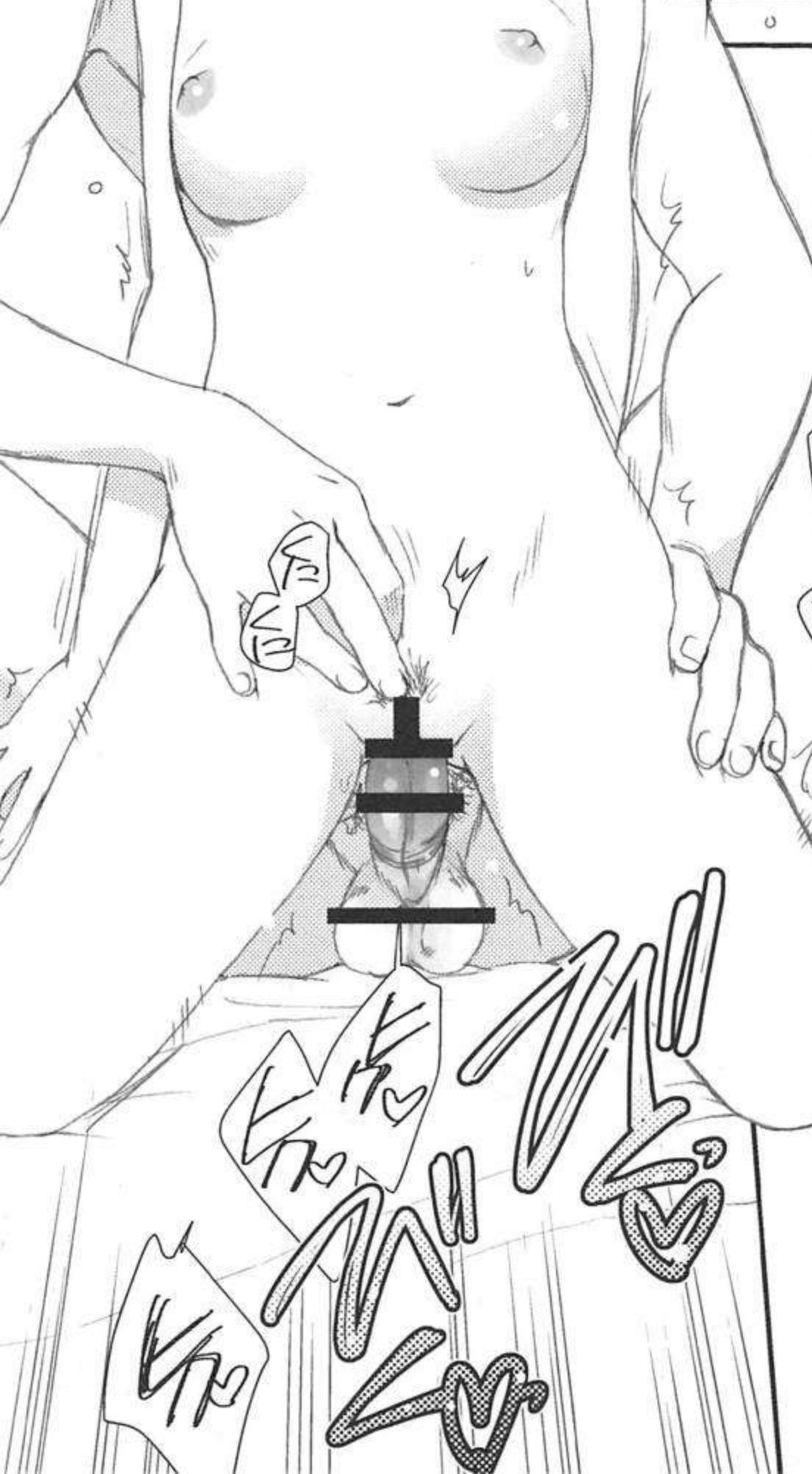
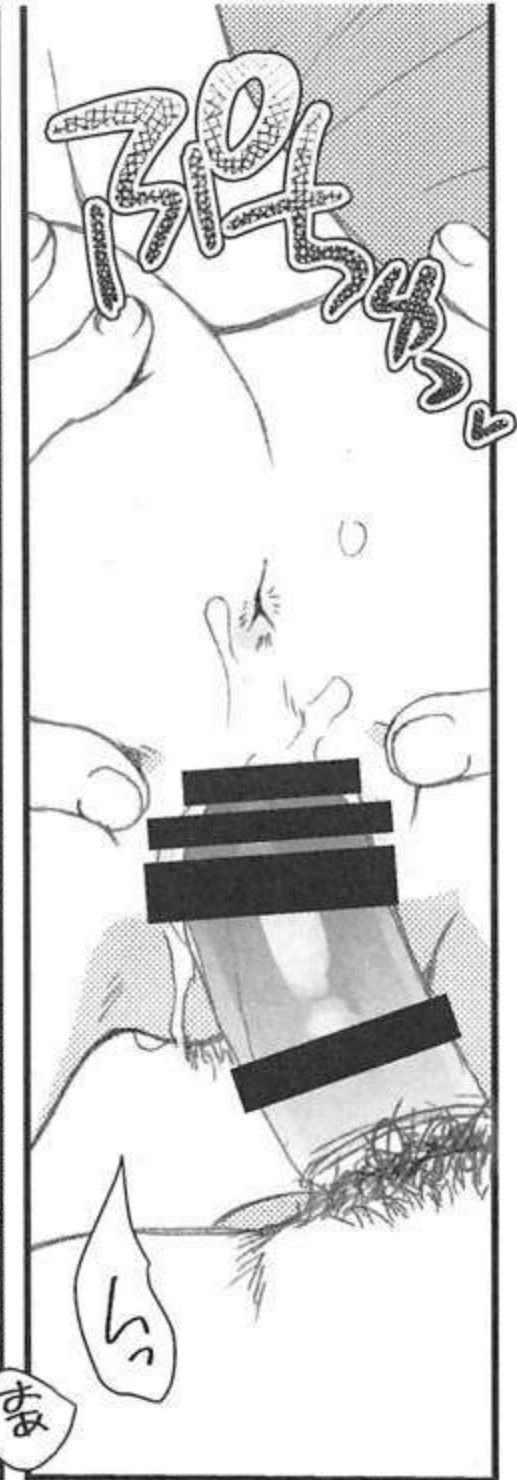
あ ♡  
あ ♡  
あ ♡

あ ♡  
あ ♡  
あ ♡

あ ♡  
あ ♡  
あ ♡  
あ ♡  
あ ♡









痛かったら  
言ってる？

アキ

ほ

あ

アキ

あ

あ

あ

あ

こんなの…  
自分の躰じゃ  
ないみたい

ほ

こ

まだ  
ヒクヒク  
してる…♡

アキ

ほ

アキ

ほ

アキ

痛い…

ほ

お兄さんも  
気持ちよく  
なってるし…♡

あ

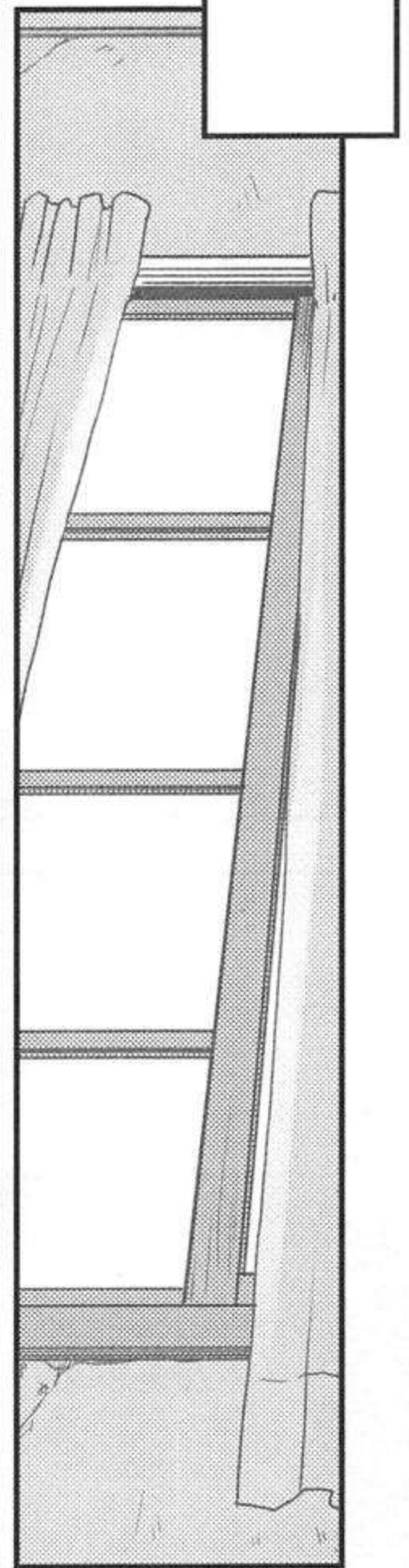
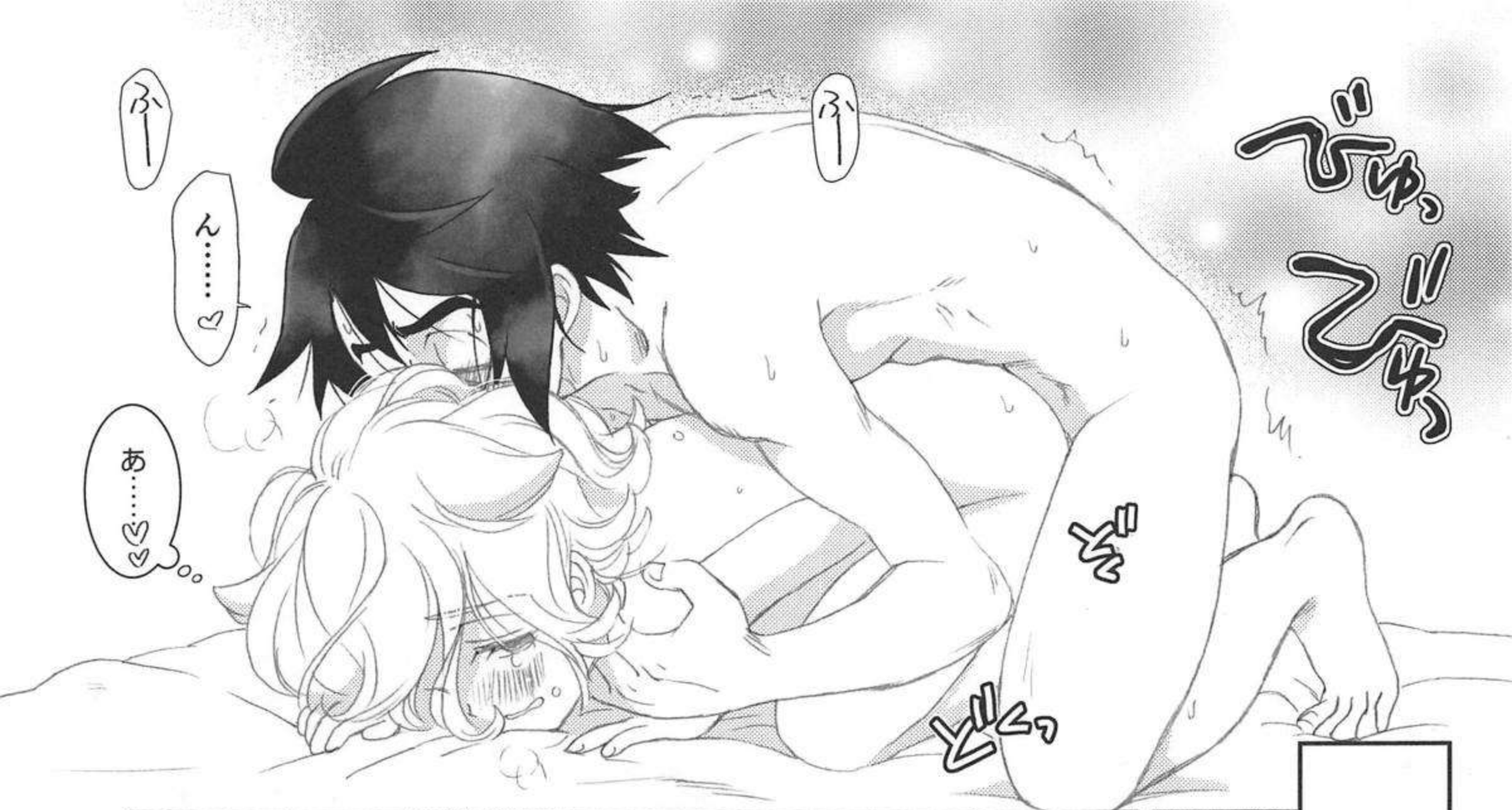
平気…

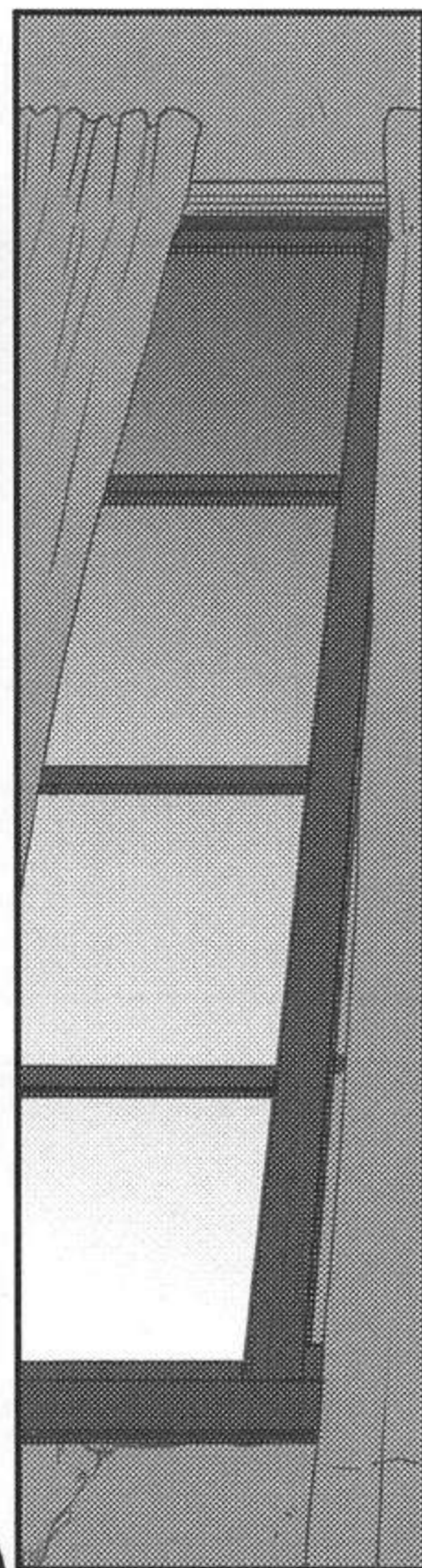
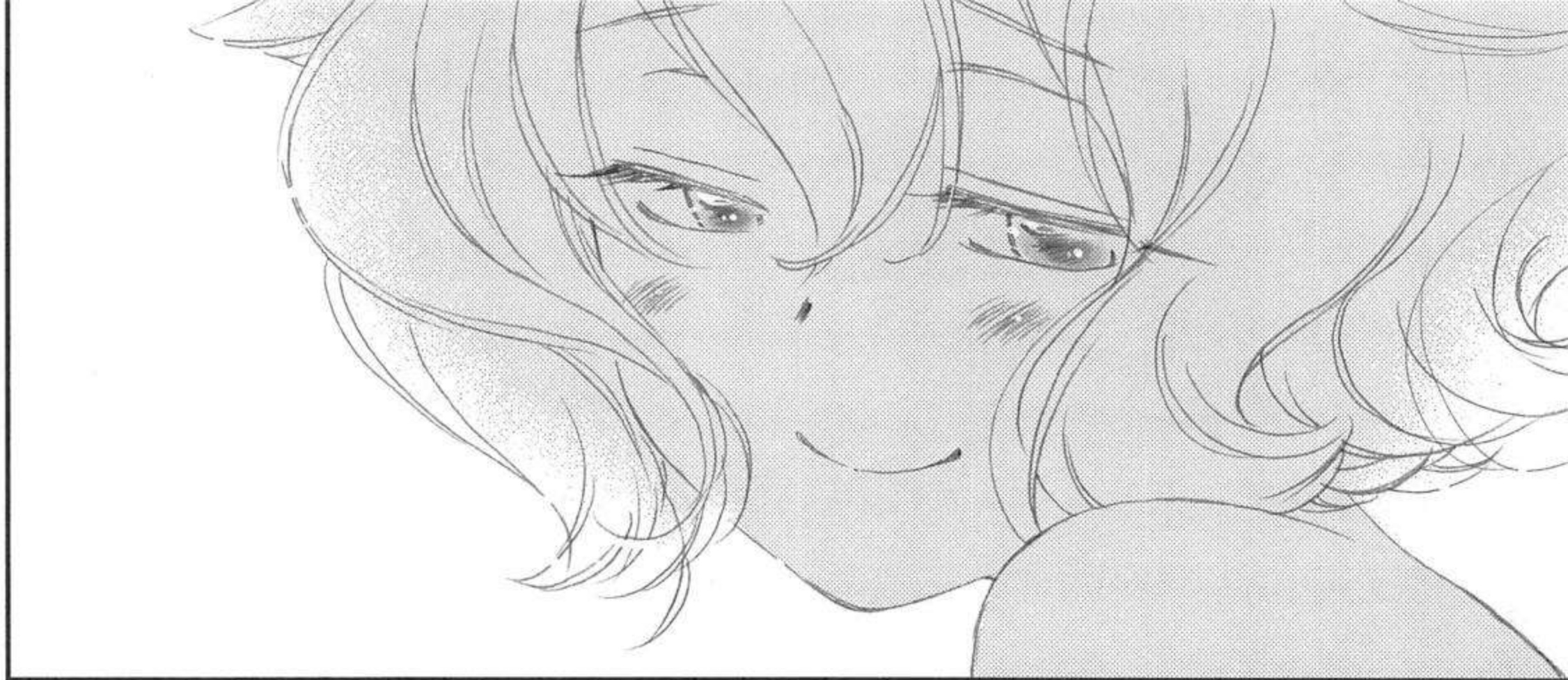
ほ

アキ

あ

あ









可愛い弁当って  
言っただけでしょ

ちっさいって  
意味の

そーだったかあ？  
でも当たったな！  
手際がいいから  
そーじゃねえかと  
思ってたんだ

アトラは  
料理人だ

いいえ  
あのっそんな



帰んのか？  
アトラも  
食ってけよ



あの

勝手に：  
ごめんなさい  
もう帰るんで



今日は

あーっか  
ありが  
い女あ  
るのー  
ー子♪  
つが



なにになに？  
JC出張  
サービス？

シノ：なんか  
いやらしく  
聞こえるん  
だけど？

やらしーんだから  
しよーがないぜ

おまねギ



ねえ？

あつたかい  
ごはん  
食べれんの？

……えっと



ムツリスケへの  
ユージンにだけは  
言われたくねーな！

誰がムツツリだ  
てめー

オルガ  
ばーちゃんちの  
野菜持ってきたよ

えっ  
サンキューなー

えっ  
ケンカ？

いつもの



なんで…

アトラの



なんで  
今まで

ボロ

あ

訊かなかつたん  
だろう…

あの…

まじか

ん？

私も  
あなたの名前を  
呼びたいです

わんぱく

ちよっ

どーした!?

ミヤカ?

なに  
泣かしてんの

ん

俺!

イナリ  
なな

えっ  
どうしたの?

らっで...

なばえ...  
じらなぐでっ

はあ!?

オルガ凄いな  
弁当の子って  
なんで判ったの？

アトラ  
俺のこと  
話してるん？

いや

そんなのミカしか  
考えらんねーだろ  
全員彼女いなーのに

偏見だ！！

ヒズケツカ  
ホツセイウ  
ハズケケ

「恋きけよ!!!」





ページの都合上カットした前戯やらを補完するコーナーです。

毎度のことながら、なかなか入んなくてwけど数コマで挿入しちゃったんで…。ホントは丁寧に時間かけたんですよ。傷つけたり嫌われたくないなあって…出来るだけ大事にしてあげたんだと…。そうだろうとも。

三日月のモノログも我慢してたのでここでwww



くつ下は、なんというかロリには不可欠というか。三日月がロリ趣味というわけではないんですけど、たまたまアトラがそうだったというだけ。(一期アトラたん準拠)  
三日月は何人くらい経験があるんでしょうね…

もう三日月好みの女に育っていくアトラが容易に想像つくわけですね。でも三日月をその気にさせるのはアトラなんだなあ。

下宿の部屋は三畳一間です。押し入れ半間。机も無し。宿題は台所のテーブルでやってる。



事後も、もちっと描きたかった補完。  
特にアトラの話をしきくでも無くただ  
一緒に居てあげるだけなんだけど。

ちょいちょい、三日月が年上ぶりを見せたりとか…。  
優しさなのか、天然なのか。

避妊してる三日月描くの初めてですね。  
(あ、ゴム有り描写自体初めてかも)  
なんか…縁遠いイメージ有るじゃない  
ですか。そもそも必要ないと言うかw  
現パロならではかな。

タイトルは「キタ・セクスアリス」からの  
造語なんですけど鴉外は未読です。



そして、ラブみが足りなかった皆様は次頁からの、  
とりこ様による別世界版のミカアト小説で  
お楽しみ下さい。  
挿絵も、どのシーンにしようか迷いながら描かせて  
戴きました。青春。

彼と彼女の週末は

とろろ



久留背工業高校の坂下に、生徒御用達のたこ焼き屋がある。その店の名物「タコタコス」はお好み焼きでたこ焼きを挟んだ胸焼けしそうな一品だ。だけど、年がら年中、腹をすかした男子高校生には、タコがいっぱい入っていて食べ方がいいがあると支持されている。ちよつと食べにくいけど。

三日月は学校帰りに例の炭水化物の暴力をオルガに買ってもらい、飢えた胃の中に流し込んでいた。すると、たこ焼き屋の裏口から、ノアキス女学園中等部の制服を着た女の子が出てきた。最近入った、かわいいと評判のアルバイトだ。

「あ。イツカ先生と三日月さん」

三日月とオルガに、人なつこい笑顔を浮かべる。確か名前はアトラと云うんだったか。毎日目になっている山と同じ名前だったので、覚えていた。

「もう、暗えから、送ってやれ、ミカ。最近、ここいらで痴漢が出たらしいしな。担任命令だ」

担任教師であり、父親でもあるオルガにそう命ぜられたので、三日月は遠慮するアトラをなにか強引に自転車の荷台に座らせた。女の子を乗せるのは初めてだったから、ちよつと緊張する。いつもよりペダルをそうつと漕いだ。さほど負担は感じない。アトラってすごく軽い。オルガの言葉通り、とつぷり日は暮れて空には星が瞬きはじめていた。住宅街に入り、アトラははしゃいだ声をあげて、正面に座す山を指さした。

「日曜日に阿刀良々山に紅葉を観に行くの。お父さんと、お母さんと」

「三人？」

「うん。わたしね、お稲荷さんが大好き

なの。だからお母さんがいつもお重にいいっぱい詰めてくれるんだ。わたしもお手伝いするの。あ、ここでいいです」

どれもこれも似たような形状の、こじんまりした家がずらつと並ぶ一角だった。自転車から降りたアトラは手を振りながら、四角い窓から橙色の明かりが漏れる家の門の中に入っていった。

家が特定できるところまで送ってよかったのかな、警戒心が無さすぎる子なのでは。自分で送っておいて心配になりつつ、三日月は再び自転車を漕ぎ出した。ふと背後を振り返っても、もう、どの箱のなかにアトラが収まっていったのか、見分けがつかない。

しばらく漕いで、前のカゴに突っ込んでおいたスヌードがなくなっていることに気が付いた。自転車を漕いでいるうちに暑くなつて、外して放りこんでいたのだ。百均で買ったものとはいえ惜しい。もと来た道を辿っていると、四つ角のすみに、ぽつんと三日月のスヌードが落ちていた。ぽつと見、踏まれたりはしていないようだ。ほつとして拾いあげると、筋違いの道に、見たような人影が通り過ぎるのが見えた。ノア女の中等部の制服。つい先ほど、三日月を送り、家のなかに入っていったはずのアトラだ。

その姿がちよつと尋常ではなかったもので、三日月はスヌードを手にしたまま、じつと彼女の様子を見つめていたが、彼に気付かず、アトラはまっすぐ歩いていく。ひつくひつくとしやくりあげながら、腕で何度も頬を拭っている。背中にスクールバッグを背負ったままだった。

帰りが遅くなったと、親に叱られて飛び出したのだろうか。それとも、三日月

の姿を見咎められてなにか云われたか。泣きじゃくる頼りなげな姿と、スカートからすんなりと伸びた細い素足の危うさが気にかかり、自転車を押しながら後をつけた。端から見れば、彼自身の姿が怪しいこと、この上なかっただろうが、彼女を放っておけなかった。アトラは青色の壁の建物の前で足を止めた。

ポケットからハンカチを取り出し顔を拭い、ティッシュで鼻をかんだ。しばらく立ち尽くした後、景気づけるかのように、ぱちんと両頬を叩いて、建物の中に入っていった。

表札には『あどもす園』と書かれていた。

その夜、オルガにあどもす園について訊ねると、そこは親のいない子供や、事情があつて親と離れて暮らす子供のための施設なのだを教えてくれた。



「あ、三日月さん」

翌週、三日月は再びバイト帰りのアトラとはち合わせた。今度はオルガはおらず、二人きりだった。すでに日は落ちていたので、三日月は再びアトラを自転車の荷台に乗せた。

目の前に阿刀良々山が望む。

「俺の名前、この土地から取ってるんだって」

「あ、三日月峡谷でしょ？ そうじゃな

「うん」

「わたしの名前、お母さんがつけてくれたんです。三日月さんは？」

「どっちなんだろう」

「え？」

「俺、赤ん坊の時に、ほんとの親は死んじゃったから」

背中越しに、息を呑む気配がした。

「名前のことは、オルガが教えてくれたけど、どっちかまではわかんない。考えたこともなかった」

掻い摘んで話す。赤ん坊の自分を連れて信号待ちをしていた両親の前で、トラックが横転した。父が母を突き飛ばし、母は我が子に覆い被さった。赤ん坊は弾き飛ばされ、傷ひとつなかった。横断歩道の反対側で目撃していた人の話だそう

だ。  
アトラはしばらく無言だった。先輩からお下がりでもらった学校指定の薄いコートの中が、じわっと暖かくなった。自転車を停めて振り返ると、アトラは泣いていた。しまったなあ、泣かすつもりなんか、全然なかったのに。

目の前に公園があった。自転車を押し、歩いて中に入る。ベンチに座ったアトラに、ちよっと待ってと伝えて、すぐそばにあったコンビニでお茶のペットボトルと、時間帯のせいとか、パンやおにぎりはあらかた売り切れていたから、棚にぼつんと売れ残っていたパックの稲荷寿司を買った。稲荷寿司。この間のアトラの話の思い出して、なんかちよっと気まずい。

公園に戻り、アトラにお茶を渡した。稲荷寿司を差し出すと、それには手をつけず、暖かいお茶のボトルを両手で握りしめ、話し始めた。

「こないだ送ってもらった家、本当はわたしの家じゃないんです。全然知らない

人の家。入った振りをして、後からこっそり出たの。わたし、親のいない子供の施設の子なの」

「……そうなんだ」

窓から橙色の明かりが漏れる、一度目を離れたら周囲と見分けがつかなくなる、こじんまりとした家。あのどこにでもある橙色に、彼女の憧れる日々があったのだろうか。

「わたしが生まれた時には、お父さんはもういなくて、ずっとお母さんと二人きりだったんだけど、お母さんもいなくなっちゃった。脳出血だったんだって。：：：嘘をついてごめんさい」

頭を深々と下げる。柔らかそうな明るい髪がふわりと舞った。

「別にいいよ。なんか気持ちわかるし。親がいないって、同情されるの、めんどくさいから」

アトラは、はっと顔をあげた。

「そうなの。なんか、気まづくなっちゃうのが、嫌で。でも余計に惨めな気分になっちゃった。馬鹿ですよ、わたし」

「それでもないよ。はい」

三日月は稲荷寿司をひとつつまんで、パックをアトラに差し出した。彼女もひとつ手に取り、食べた。三個人りだったので残りの一個をアトラに譲ると、アトラは半分かじって、残りを三日月の口元に差し出した。ぱくりと一口で食べる。なんだか余計に腹が減ってしまった。アトラの小さな指先についた甘い汁を舐め取りたい衝動をこらえる。

ふと、アトラの唇に胡麻粒が付着していることに気が付いて、何も考えずに舐め取ってしまった。唇と唇が触れ合う。慌てて離れた。

「ごめん。白胡麻、ついてたから」

なにやっていたんだ、俺。びっくりして目を丸くしていたアトラは、ふふ、と笑って三日月に口付けを返した。

「白胡麻、ついてたから」

そう云いながら、膝の上に乗ってきた。おお、あったかい、じゃなくて。なにこれ、キューテンカイ？

「ちよっと待って」

「待たない」

「急ぎすぎでしょ」

アトラは責めるように三日月を睨んだ。「パンダの赤ちゃんが産まれて、日曜日にお母さんと観に行く約束をしたの。すっごく楽しみにしてたんだけども、お母さん、熱が出ちゃって『観に行くのは来週ね』って。でも、お母さんには来週は来なかった。……だから、もう、待たないの」

ねえ、本当にわたしたちには明日は来るの？ 三日月の首に手を回しながら、アトラは訊ねた。

そうだね、そんなのわからないよ。アトラの背と腰に手を回して、三日月は唇を重ねた。

そっと舌を差し入れる、アトラの舌は柔らかく滑って、舌が絡み合った瞬間、背筋がゾクゾクした。アトラも同じようにゾクゾクしているのだろうか、背中を引っかかれる。舌を絡めれば絡めるほど、ひっきりなしに痺れるような快感が全身を駆け抜けて、股間に血液が集中していく。セーラー服の隙間から手を差し込んで、肌に触れた。アトラの身体がびくんと跳ねた。

「きやつ、冷たい」  
「ごめん」



慌てて手を引っ込めて、膝に擦り付けて摩擦で暖めようとしたら、アトラが三日月の手を取って、はあ、と暖かい息を吹きかけながら、両手で擦ってくれた。暖かい。けど、股間のむず痒さが増してきて困る。お茶のボトルを握って暖めたほうが早いかも、という考えがよぎったが、もう飲んじやったことにした。

「えっと、もう、さわってもいい？」

「うん……」  
暖めてもらった手を再び服のなかに入れる。腹を撫でると、くすぐりたいとアトラは笑った。ブラジャーの隙間から指を差し入れた。女の子の胸に直で触れるなんて初めてだから、加減なんてわからない。できるだけそうと触る。やわわわと気持ちいい。もっと触れようと指を奥まで差し込もうとするうちに、ブラジャーが上にずれて、ささやかに膨らんだ胸を手のひらで覆えるようになった。胸の突起をそっといじっているうちに尖ってくる。

「すごいな、アトラのここ、固くなってきたよ。痛くない？」

「大丈夫……でも、あんまり、そういうこと云わないで」

「どうして？」  
「わたし、まるでエッチな子みたいだから」

だってアトラってエッチな子じゃないの？と疑問に思いつつも、ごめんって謝った。女の子って難しい。セーラー服から手を引き抜いて、今度はスカートの中にしのばせた。太股の外側は大きめに触れてひんやりと冷たかったのに、内側に行くにつれて熱くなっていく。下着越しに下から上に、なぞり上げた。

「ん……っ」

「ね？どこが気持ちいい？」

少しだけ力を入れて、上下になぞっていく。ある一点で、アトラの反応が変わった。

「ここ、気持ちいいの？」

強めに押ししてみると、アトラは歯を噛みしめて、きゅつと目を瞑った。

「よくわかんないけど……もつと、して」

やっぱり、エッチじゃん。息を弾ませるアトラの様子を伺いながら撫でていくと、下着がしつとりとしてきた。

「濡れてきたよ」

アトラの顔が、かあつと火照って、つられるように自分も恥ずかしくなってしまう。下着の隙間から指を差し込む。柔らかな叢の奥はぬるぬると濡れていた。女の子の濡れたアソコ、直に見てみたい。

「めくって見てもいい？」

「だ、ダメ。恥ずかしいもん。誰か来ちゃうかもしれないし」

こんなところで始めようとしたくせに、案外気が小さいんだな、と妙に感心してしまった。確かに誰かに見つかったらまずい。幸い、今は自分たち以外、この公園にはいないけど。

「えっと」

アトラはあたりを見回し、頬を染めて息を呑む。

「あんまり、じっと見ちゃ、いやだよ」

そう云って、スカートの裾を持ち上げてくれた。

「うん」

もちろん、凝視した。へえ、ピンクと水色の縞々のパンツ履いてたんだ。腰の中央に小さなリボンが付いていて、なんかすっごく女の子って感じて、興奮して

しまう。パンツの腰まわりに指を引っかけて下ろす。

「あつ」

アトラは小さく悲鳴をあげたけれど、嫌がっている素振りはない。薄い和毛に指を這わせ、その下の濡れた割れ目に指を差し入れて押し開くと、外灯の光を反射して、ぬらぬらと艶めかしく光る。

(すげえ)

気が付いたら、口を付けて吸ってしまった。

「や、やだ……」

「なんか、寒そうだし」

自分でも何を云っているかわからなかったが、一応、本気だった。そう、アトラが寒いといけないので、ちゅうちゅうと、音を立てて吸ってあげる。

アトラは裾から手を離し、三日月の頭を掴んで、いやん、とかひゃつとか、甘い声をあげながら膝を揺らす。その振動も手伝い、股間のもものが体積を増していくのを感じた。

あ、もう限界かも。三日月は身体を起こして、学生ズボンのベルトに手をかけた。

「俺の、見る？」

アトラは大きく目を開いてこくりと頷いた。もう、絶対エッチな子じゃん。フアスナーを下ろす。引き出した三日月のそれは天を突いていた。アトラは興味津々な表情で、まじまじと見つめている。

「おっきいね……」  
感嘆の声を受けて、ちよっぴり得意な気分になった。

「もっと大きくなるよ。触ってみる？」

「うん」

アトラは素直にうなずいて、おずおず



と手を伸ばしてきた。ほんとにエッチな子だ。いいけど。

陰茎をそうっと握って、亀頭を撫で撫でてくれた。やっべえ、すっげえ気持ちいい。

「そこすごくいい。もっと強く触って」「こ、こ、こ、かな？」

柔らかな指裏で扱いてくれる。上手い。こういうの、慣れてるのかな。外見からは全然そんな風には見えなかったけれど。なんだろう、なんかモヤモヤする。

「本当だ、大きくなったね。すごいね」

無邪気に喜んでくれて誇らしくなった。そういえば、すっかりアトラの敬語はとれてしまっている。でもこっちのほうが、しつくりきて、なんかいい。

アトラも気持ちよくしてあげたくて、再び彼女のそこに指を滑り込ませ、とろりと密が溢れ出る窪みの奥へと指を滑らせていく。ここだろうかと押した一点に、指が潜り込む。けっこうきつくて、第一関節の中ほども進まない。アトラの身体が強ばるのを感じた。痛い？と訊ねると首を振る。親指の裏で先ほど愛撫した箇所を刺激してあげると、少し緩んで、ゆっくりとだけ指を根本まで沈めることができた。親指の腹でそこをくりくりと愛撫しながら、指を抜き差しする。指一本入れただけでアトラはちよつと苦しげで、こんなところに、あれを突っ込むことなんてできるんだろうか。

アトラがはっと顔をあげて、通りの方に振り返った。話し声が近づいてくる。親子連れのような。まずい。やめようかとアトラを伺うと、無心の表情で三日月のそれを扱く手の動きを早めた。アクセル踏みっぱなしだこの子。それなら、早

くゴールしてしまえばいい。三日月も覚悟を決めて、アトラの中をかきまわす指の動きを早めた。

はあ、はあ、と絡む二人の荒い息づかいがやけに大きく聞こえる。誰かに見られてしまうかもしれない、という焦りに興奮と官能はいや増して、三日月はすぐに限界を迎えた。

「あつ、やば……出る……」

アトラが、かがみ込んで三日月のそれを口に含んだので、びっくりしてしまっ

た。

「ちよ、なにしてんの、アトラ……あつ」その途端、三日月のペニス、アトラの口内にどくどくと欲望を吐き出した。女の子が自分のそれを口に含み、精液を飲み干してくれていることに、なんだか感動してしまう。

親子連れが角を曲がって姿を現すと同時に、アトラはさつと三日月の隣に座り直した。つい、先ほどまで行為の真っ最中であつた二人の存在に気が付いた様子すらなく、親子連れは通り過ぎていった。ハンカチで口元を拭いながら、アトラは口を開いた。

「あのね、わたし、処女なの」

「えっ マジ？」

すっごく積極的だったから、経験があるんだとばかり思っていた。けれど、確かにきつかったし。

「俺も、童貞」

正直に打ち明けると、そうなんだあ、となぜかアトラは嬉しそうだった。三日月も嬉しかった。モヤモヤしていたものが、すうっと解消した。そして、彼女の初めてを、こんな行き当たりばったりに奪わなくてよかったと思った。

「三日月さんって、どこに住んでるの？」

「螢火町に下宿してる。来る？」

「いいんですか？」

「うん、今週は試合あるから、来週なら」そのまま二人は無言で寄り添い続けた。冷気は次第に強くなっていくのに、不思議と身体はいつまでもぼかぼかしていた。



下宿『いさりび荘』の風呂場は離れにある。

三日月が湯船に浸かっていると、換気用の小さな窓から、甘く愛らしい歌声が漏れ聴こえてくる。先に風呂をもらったアトラが歌を口ずさみながら、入り口の外で三日月を待っているのだ。彼女が風呂に入っている間は、三日月が同じ場所で誰も入ってこないように見張っていた。「湯冷めしちゃうから、部屋に戻ってて云ったのに」

アトラが歌っているのは、隣の部屋のオルガが最近ハマっているという、古い歌謡曲だ。よく聴こえてくるから、覚えてしまったのだろう。しかし、元の曲を知っているから何の曲かわかるけれど、そうじゃなかったら、絶対わからない。ということ、つまり……。歌声がぴたりと止んだ。

「お、アトラじゃん。三日月は？」

「馬鹿だな、今、風呂入ってるに決まってるんだろ？」

「そうなんです。今、三日月が入ってて。あ、わたしはさっきいただきました」

柔道部の先輩であり同じ下宿先の、シノとユージンの声だ。この二人はだいたい、いっつもつるんでいる。







「女の子の入った湯かあ。いい匂いしそ  
う」

「おい、やめろよ。つーか、もう、三日  
月が浸かったんだから意味ねえだろ」

三日月は、ざぼーっと湯船からあがつ  
た。

「そーいやさあ、アトラは三日月のどこ  
に惚れたわけ？」

ろくすっぽ身体を拭かず、凄まじいス  
ピードで服を着て、ガラリと派手な音を  
立てて戸を開け外に飛び出た。

「なにしてるの」

先輩相手であるのに敬語が抜けている  
が、もはや周囲から諦められている。生  
意気だと詰られながらも、不思議と許さ  
れているのは、彼の際だった才能とそれ  
をひけらかさない人徳故だろうか。

「み、三日月。べっつに、ちよっと世間  
話してただけだかな」

「そうそう。ねー、アトラちゃん、あい  
つのどこがいいの？」

「おい、よせつて」

「二人とも、うるさいから」

アトラの手を引いて、二人から離れた。

部屋に入ると、甘酸っぱい匂いが漂っ  
ていた。アトラはちゃぶ台に置かれたお  
櫃に近づいて、被せていた布巾を取り去  
った。ピカピカと光る酢飯が現れる。混  
ぜ込まれた細かく刻んだ紅生姜の色が移  
り、ほんのりとピンク色がかって食欲を  
そそる。週末に備え、予行演習でアトラ  
が拵えたのだ。三日月も団扇で仰ぎ倒す  
のを手伝い、けっこう大変だった。

「どうかな？」  
俵型に握った酢飯をアトラに食べさせ

てもらった。甘酸っぱい酢飯に紅生姜の  
ピリツとした辛み、胡麻のプチプチとし  
た食感が小気味良い。今度は遠慮なく、  
味や胡麻が付着した、アトラの指や手の  
ひらをペロペロと舐める。

「旨い。ピンク色なの、アトラの家では  
そうだったの？」

「ううん。わたしのオリジナル。お母さ  
ん、仕事で忙しかつたから、普通の白ご  
はんに味を付けた油揚げを被せただけ  
のお稲荷さんしか作れなかったの」

「それ、おいしいの？」

「……えっと、あんまりおいしくなかつ  
た」

苦笑するアトラの表情がふと曇った。  
「アトラ？」

薄く開いた唇がわななく。あ、まずい  
かも。

「お母さんのおいしくないお稲荷さん食  
べたい」

手のひらで顔を覆ったアトラの震える  
肩を、三日月はそうっと抱きしめた。ア  
トラは泣き虫だ。

「ごめんさい。泣いてばっかりで」

アトラは三日月の腕を外そうとしたが、  
彼女を抱きしめてくる腕の力は強くなる。

「ダメ。俺、アトラが泣いたら、抱きし  
めたくなっちゃう病気にかかっているんだ」

アトラは吹き出した。  
「だったら、いっぱい泣いちゃおうかな」



布団の上に仰向けに横たわったアトラ  
の足を、大きく開かせて中に侵入してい  
く。風呂上がりにセックスするのは好き  
だ。アトラがいつにも増して、柔らかく

しっとりして、とろけるのも早くなる気  
がする。

最近、めっきり寒くなってしまった  
から、布団を被ったまま身体を重ねるこ  
とのほうが多くなった。

本当はもっと視覚的な刺激があったほ  
うが興奮が高まるのが早くなるのだけ  
ど、アトラの身体は隅から隅まで余す  
ところ無く見せてもらったし、見えないぶ  
ん、肌の感覚が鋭敏になり、触れ合う快  
感が増して、これもすごくいい。それに  
アトラがもっと大胆になって、いっぱい  
声をあげてくれる。

さつき、キスをしながら、胸やお尻を  
いっぱい愛撫してあげたから、アトラの  
そこはとつくにぐしょぐしょになって、  
三日月を待ち焦がれていた。

「は……あんっ」

甘い声にいざなわれ、一番奥まで貫い  
た。先端になにかがコツコツと当たる。  
子宮の入り口らしい。今、自分はこんな  
に奥まで彼女を犯しているのだと、奮い  
立つ。ズツ、ズツと腰を引いては打ち付  
ける。次第に動きは早くなり、アトラの  
甘いあえぎ声もまた、早く、大きくなっ  
ていく。

唐突に、薄い壁ごしに音楽が聞こえて  
きた。曲目は昔、兵隊たちが歌っていた  
という、海軍小唄。俗に云うズンドコ節  
だ。

なぜこんなタイミンでズンドコ。よ  
りにもよってズンドコ。隣部屋のオルガ  
を恨みながら、目の前のセックスに集中  
しようとするふりがあると、三日月の腰が、  
そんなつもりはいっさいなかったのに、  
歌の調子に合わせて動くようになってし  
まった。必死でタイミンをずらそうと

するも、むなしく腰がトッコズンドコズンドコしてしまう。

アトラも気付いて、かわいらしい笑い声を立てた。

「もう、笑わないでよ」

三日月はふてくされた。恥ずかしくて萎えちゃいそう。でも止まらなくって、どうしようもない。

「かわいい、あの子が忘れられぬー」

音楽に合わせて、アトラも歌い始めた。

いつも三日月が聞き耳を立てていることに気づいたら、歌うのをやめてしまったのに。でも、やっぱり。

「アトラって、音痴だね」

「もうーっ だから聴かれるの、やだっ たのに」

ぷりぷりと怒りつつも、歌い続けてくれる。サビの合間には『三日月ー』と、合の手まで入れてくれた。ちよつと照れているところが余計にかわいらしくて、そそられる。彼女の優しさに甘えて、三日月も開き直ってズンドコと、歌声に合わせて、アトラとひとつになることに集中した。

次第に歌詞の合間に『あん』とか『あ、そこ、イイツ』とか『もつと』『ひっ、気持ちイイよお』といった言葉が混ざる割合が増えて、終いにはアトラを貫く、ぐちよぐちよと濡れた音と、あえぎ声が響くだけになった。二人同時に達する頃には、いつしか曲は終わってしまった。

うとうとしながら、ふと三日月は思い出した。腕のなかのアトラに問いかける。「そう云えばさつき、シノたちと話した時……」

「なあに？」

「アトラって、俺のどこが好きなの？」

風呂場の前でのユージンたちとの会話。アトラは顔を赤らめて、視線を逸らせた。

「……わかんない」

「嘘でしょ。今、なにか考えたでしょ？」

「云えない」

さらに紅潮した顔を、ぱふんと枕に埋めた。

これほど照れるということは、ひよつとして……

（ちんこかな？）と三日月は推測した。

「そんなこと、云えない。云えないよ、ぜったい……」

アトラは頬に両手を当てて、ゴロゴロと転げ回っている。

（ちんこに違いない）と三日月は確信に至った。

「教えてよ」

転げ回るアトラを抱きとめて問いたただす。

「……怒らないでね。あのね、あのね……わたし、三日月の顔が好きなのっ」

「……」

「一目惚れなの、初めて見た時から、ずっとかっこいいって憧れてたの。面食い過ぎてごめんなさい」

「それ、絶対ほかの奴には云わないでね」

アトラは、はっと顔をあげる。

「でも、それ以外にも三日月の好きなのころ、いっぱいあるからね。ね？」

「いいから」

心底申し訳なさそうなアトラの様子に、いっそういたたまれなくなってしまう三日月だった。

アトラは早朝に帰っていった。三日月のたつての願いもむなしく、シノとユージンに部活で顔を合わせた途端、こうかわかれた。

「おっ、イケメン登場」

「色男様のご帰還だぜ」

「やめなよ、二人とも」

居合わせた、オルガの親友であり、柔道部のOBでもあるビスケットが制止するが、彼の目も笑っている。

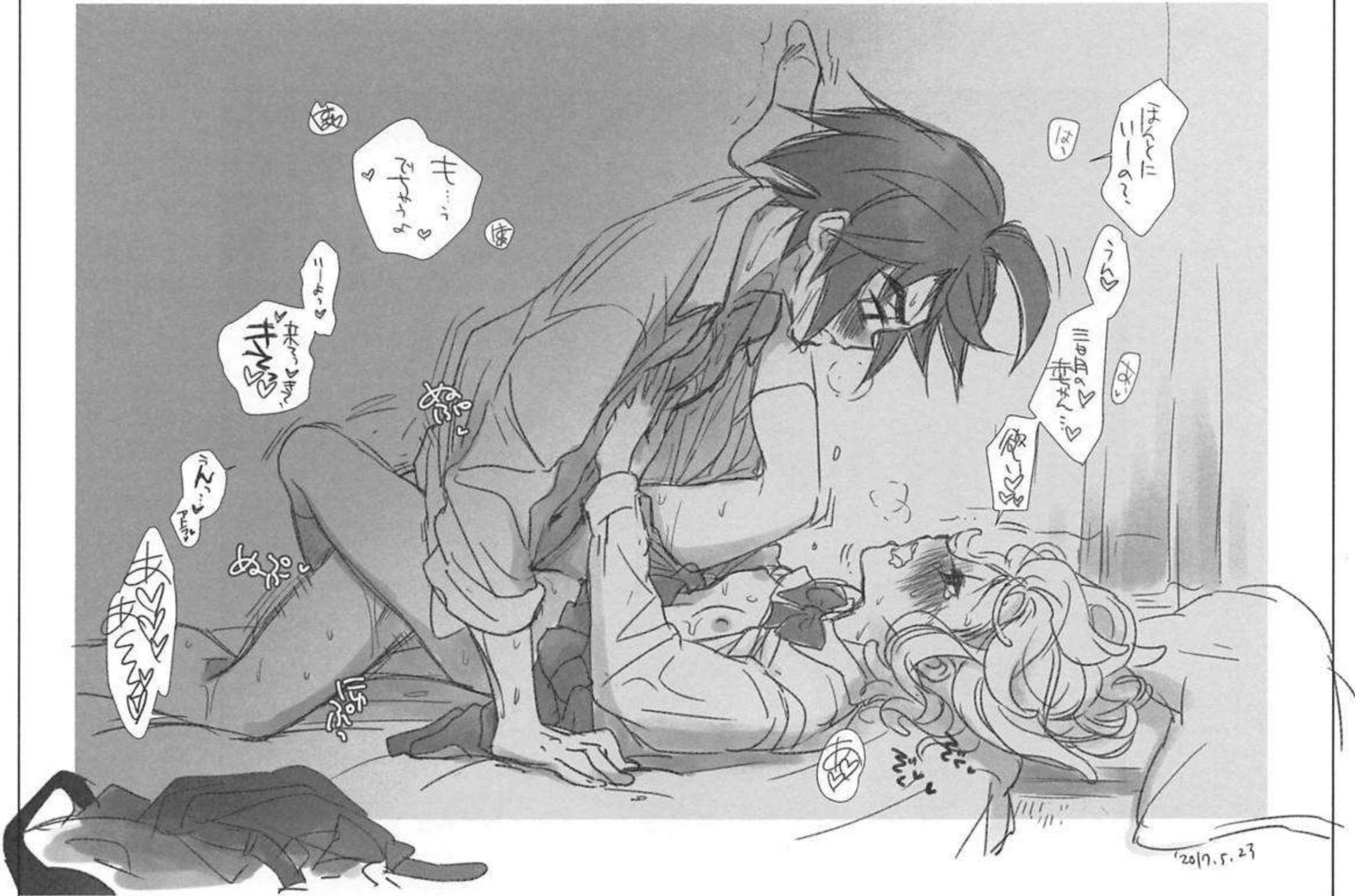
もう、最悪。こいつらぜったい知っている。

（アトラの馬鹿）

三日月は窓の外に望む阿刀良々山に向かって、心の中で吠えた。

その週末、三日月とアトラは、オルガや同宿人たちと、阿刀良々山に遊びに行った。紅葉はすでに終わっていたが、樹木にしがみついた初霜が陽光を浴びてきらきらと輝き、彼らの目を楽しませた。昼には一般客に解放されたロッジでアトラ特製の稲荷寿司のお重を広げて、稲荷寿司や唐揚げを皆で争うように口の中に詰め込んだ。

僕たちに来週は来る。そのまた来週も、ずっと。トッコズンドコ。



現代学パロもずっと描きたくて、webではアパート暮らしでしたが某アニメの影響で下宿モノに設定変更しました。

予定していたのはいつも通りミカアトがラブでエロいやつだったんですが、作業的に間に合いそうになくて、急遽出会い編として作っていたら全然想定していなかった話になってしまい、自分でも驚いています。なぜこんなセンチメンタルな話に…。

「今から下宿パロで小説頼めますか？」

この一言だけで、ゲスト小説を寄稿して下さった、とりこ様。もう本当に本当に有り難うございました。(248頁の大作脱稿直後だったのに…)

11月の下旬にお会いした時に下宿パロの話題になり、その時たまたま今回のズンドコネタを聞いて「ん？それはオヤジギャグなの？」と

イマイチな反応をしてみました。あのズンドコがこんなに可愛くて、どこか懐かしいエロ甘酸っぱい話に仕上がるなんて！勿論期待しがありませんでしたけど。流石です。

「ちんこに違いないと確信に至る三日月」…ほんとバカで好き。

私の作品とはまた違う現パロ世界が広がりました。

ちなみに裏表紙は「彼と彼女の週末は版ミカアト」です。(コピーと合っていないけど元は扉のおにぎりミカだったんですが、お稲荷さん持たせたくなりまして。アトラのセーラーもちょっとだけ変えてみました。

続編も描きたいなと思ってます。恋愛感情を意識したミカアトで！アトラがJKになった下宿での日々とか。

それではここまで読んで戴き有り難うございました。

やまぐちしんじ



## ミクスタ・セクスアリス

—早く大人になりたいくて—

2018年12月29日発行

著者 やまぐちしんじ

発行所 やまぐち楼

<http://yamaguchirow.ken-shin.net/>

twitter @yamaguchirow

印刷所 関西美術印刷(株)

SpecialThanks とりこ様 @torico1209

※本文の無断複写・複製・ネット配布を禁止します

JCAトラが名前も知らないDK三月とえっちしちやいました。

